

<牧会ミニ通信>No.18 2020. 8. 30

「二十四節気」によると、8月23日は「処暑」(しょしょ)でした。厳しい暑さの峠が越え、朝夕には涼しい風が吹き、心地よい虫の音が聞こえはじめる頃といいますが、まさにその感があります。

毎年、処暑を挟んだ前後に、信州霊泉寺の鄙びた中屋旅館において、「信州夏季宣教講座」が開催されてきました。回をかさねて今年で28回目を迎えています。

今年のテーマは「戦後75年一敗戦世代に聴く」です。ところが、悪性コロナの影響により、他県を超えた移動ができず、やむなく会は中止となり、発題者の一人であったわたしもその機会を失いました。

「信州夏季宣教講座」がスタートしたのは、その動機と背景とがありました。戦後、日本にきた米国の宣教師たちの大半は、伝道には熱心でありました。しかし、教会形成には無関心でした。そうした問題意識の下に講座がスタートしました。第一回は1993年でした。

発起人であるわたしが、初回講座の勧めをしました。確か、「バビロン捕囚期の日本の教会の現状」というテーマでした。

次第に講座も盛況になりましたが、何回目かの講座の時でした。総勢60人ほどの参加者が、記念写真を撮るため、床の間の前に整列した瞬間、床が重みに耐えきれず、突然バリバリという音響とともに床が抜け落ち、全員が前のめりとなって落下したハプニングがありました。

世間では、俗に「三号雑誌」と揶揄されます。夏季講座は三回どころか、今年で28回を迎えております。しかも、実に多岐にわたるさまざまな課題と取り組んできました。しかも、発題された内容は、「いのちのことば社」からその都度出版されてきたのです。

今日まで継続してきたのは、既に故人となった東京告白教会の渡辺信夫牧師、信州上田教会の四竈牧師の惜しみない指導と協力とをいただいたことを記しておきます。

周東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次